

## オスロ郊外にて—— 巻頭言にかえて ——

横 田 健 一

一昨年(一九五四年)の七月十八日、オスロ郊外ブイグドイ半島にある博物館を訪れた。ここはオスロの港を東側前面にみる半島の先端部で、有名な民家集落と北方民俗の博物館、ヴァイキングの船三隻とその遺物を置くヴァイキング博物館のほか、南東太平洋四千三百軒の海を南米からポリネシアに役コンチキ号で航海したトール・ヘイエルダールの筏を保存する博物館および、海洋博物館がある。朝からこれらを一生懸命に頑張ってみたが、ついに最後の海洋博物館は時間切れで、みられなかつたのは大変残念でならない。この最後の海洋博物館はノルウェーの誇る大探検家アムンゼンやナンセン等探検家たちの船や遺物等の他の関係物が保存してあるということであつた。私は暮れなずむオスロ港に面した博物館の窓から辛くも中をのぞき見したにすぎない。このブイグドイ半島には、連日多くのノルウェー青少年たちが集つて祖先の功業を熱心にみているのである。ノルウェーは北ヨーロッパの寒い、人口の少い国、弱い国で資源も多くないが八世紀より十世紀頃にかけて全ヨーロッパを股にかけたノルマン人の海賊ヴァイキングの子孫であることを誇りとし、その精神と活動力を受け継ごうとしている。その成果がアムンゼンやナンセンの南極、北極の探検やヘイエルダールのコンチキ号である。現在ノルウェーは海洋航行船舶保有高一千百五十万トンで、わが国を僅かながら上廻り、世界第四位の大海運国である。人口が日本の十数分の一であることを思えば、これは大したことだといわねばならない。かれらの海洋雄飛の気魂と後進の青少年たちに対する熱心な実教育には、深く学ぶべきことが多い。

私はブイグドイの博物館を終日見て歩き、ひるがえって日本の土を思い、羨望と寂寥の念をおぼえたことであつた。日本は探検という点では後進国であると痛感せざるを得ない。今の日本の青少年諸君の奮起を望みたい。それには、まず基礎的な学力を身につけて欲しいと思う。